

「頭中将の御小舎人童」考その他：『堤中納言物語』の本文批判

後藤，康文
北海道大学大学院教授

<https://doi.org/10.15017/8907>

出版情報：語文研究. 100/101, pp.67-75, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



「頭中将の御小舎人童」考その他

——『堤中納言物語』の本文批判——

『堤中納言物語』が、現存諸本の本文のみを頼りにして十分に読み解けるような素性の作品でないことは、あらためて述べるまでもない。この短篇物語集のより正確な読解を目指すためには、どうしても推測批判による本文の復原作業が不可欠になってくるのであり、私自身、折に触れてこの問題に取り組んできた。今回は、三篇のつごう四箇所を扱うことにする。

一 頭中将の御小舎人童

はじめに、『ほどほどの懸想』の次の箇所(注)から。

いづくのにかあらむ、薄色着たる、髪は丈ばかりある、
頭つきやうだい、何もいとをかしげなるを、頭中将の御

後 藤 康 文

小舎人童、「思ふさまなり」とて、いみじうなりたる梅の枝に、葵をかざして取らすとて、

梅が枝に深くぞ頼むおしなべてかざすあふひのねも
見てしがな

といへば、

しめのなかの葵にかかるゆふかづらくれどね長きも
のと知らなむ

と、おし放ちていふもされたり。

(九七頁五行〜九九頁一行)

明るい華やぎに満ちた葵祭の時分、頭中将に仕える小舎人童が、ひとりの美しい女童を見初めてすぐさま求愛の歌を贈り、女童もこれを受けてなかなか達者に切り返す。この贈答をきっかけとして、ふたりはやがて結ばれることになるのだ

が、ここで取りあげておきたいのは、傍線部「頭中将の御小舎人童」という表現。諸注は(注)気にもとめていないようだけれども、これはいかにも異様な表現ではなからうか。「御隨身」の例であれば、

「をちかた人にも申す」と、ひとりごち給ふを、御隨身（注）ついで

（『源氏物語』夕顔巻／日本古典文学全集・二二〇頁）

ありつる御隨身して（同／同・二二五頁）

「君は御直衣姿にて、御隨身どももありし。なにがし、くれがし」と数へしは、頭中将の隨身、その小舎人童をなん、しるしにいひ侍りし。（同／同・二二四頁）

等々、普通に見られるわけだが、「小舎人童」に「御」は、はたしてどうであろうか。これを頭中将に対する敬意の反映と判断するのは、少なくともこの場合むりがあろう。たとえば、小島雪子「『ほどほどの懸想』論——物語に言及する物語——」（『宮城教育大学国語国文』、平五・一〇）王朝物語研究会編『堤中納言物語の視界』、新典社、平一〇）が、

「御小舎人童」の「御」は、語り手から小舎人童の主人である頭中将への敬意をあらわしたものと考えられるのであり、語り手は、小舎人童と女の童の傍らで出来事を見聞きしている頭中将寄りの人物として設定されている

ものと推測される。

と説くように、である。

私見によれば、問題箇所中の「の御」は、「に（爾）候」

の（乃）御」の単純な誤写——披見諸本の表記はすべて「乃御」——による転訛本文である可能性が高く、傍線部本文は、

頭中将に候（注）ふ小舎人童

に改訂されるべきではないかと思う。「爾」と「乃」、「候」と「御」はともに紛れやすい文字同士であるし、これならば後出の表現「君の御方に若くて候（注）ふ男」（一〇三頁五、六行）とも明確に対応することになる。それからあらぬか、諸注の訳文の中には、「頭の中將に仕へてある小舎人童」（『評釈』・通釈）、「頭の中將の（屋敷に仕える）御小舎人童」（『対照』・現代語訳）、「頭の中將にお仕える小舎人童」（『全訳注』・現代語訳）など、むしろこの復原本文にこそふさわしいものも見受けられるのである。

『ほどほどの懸想』の本文再建（および正しい解釈）については、拙稿「『ほどほどの懸想』試論——頭中将は後悔したか——」（『国語国文』、平五・七）王朝物語研究会編『堤中納言物語の視界』、新典社、平一〇）、同「『ほどほどの懸想』覚書」（『北海道大学文学部紀要』、平一〇・一）において

てそのほとんどを述べ尽くした。本節はそれらの、ささやかな補遺にあたる。

二 人心あきのしるしのかなしきに

つづいて、『思はぬ方にとまりする少将』の次の箇所。

何ごともいと心憂く、人目まれなる御住まひに、人の御心もいと頼みがたく、「いつまで」とのみながめられ給ふに、四五日いぶせくてつもりぬるを、「思ひしことかな」と心細きに、御袖ただならぬを、「われながら、いつ習ひけるぞ」と思ひ知られ給ふ。

人心あきのしるしのかなしきに「かれゆくほどのけしき」なりけり (一二二頁二行～一二三頁二行)

思いがけず契りを交わすこととなつた相手、右大将の少将の訪れが四五日途絶えた。案の定と思いつつもみずからの心境の変化を痛感させられた故大納言の姫君は、涙に暮れながら歌一首を手習いにするのであつた。

ここでの問題点は、その手習歌の第三句「かなしきに」の「に」といつ本文。『校本』によれば、土岐武治氏のいわゆる第一門第一類第一種に属する神宮文庫蔵僧慈延自筆本と、第三門第一類第一種の李花亭文庫本以下三本、同第二種の藤井

乙旧蔵本以下三本は、「かなしきに」を「かなしきは」に作るようであるが(一七七、一七八頁)、一般に善本とされる諸本ほか大多数の伝本では、上掲のごとく「かなしきに」とある。そこで、このかたちの本文に依拠した諸注が「人心」歌に与えた訳文を調べてみると、実態は次のとおりであつた。

秋になつて草木の枯れてゆくように、あなたのお心はもう私をおあきなすつて、私を離れてしまはれるのは悲しい。
(『校註』・頭註)

秋が来ると草木は枯れてゆく。君に飽きが来て、君の心が私から離れてゆくさまの悲しさよ。(『新講』・通釈)
秋が来たしるしの悲しいにつけ、草木が枯れゆく時の様子であつた——人の心に飽きがきた徴候の悲しいにつけ、私から離れてゆく時の様子であつたよ。
(『大系』・頭註)

人の心に秋の兆候がきざしても悲しいものなのに、今はあの人の足も遠のき、枯れゆく秋の末のけしきなんだわ
(『全集』・口語訳)

あの方の心に秋といふ飽きが来た証拠で、それで私は悲しんでゐるが、その上更に、あの人は、この秋の草木の葉が枯れ落ちるやうに、私のもとを離れて行つてしまふ

ほどの有様である。(『注釈的研究』・通釈)

あの人の心に飽きのきざしが見えて悲しいのに、いよいよ足が遠のく様子、ほんとうに悲しい。

(『全訳注』・現代語訳)

人の心には、秋のきざしが悲しいのに、いまは枯れてゆく秋の末の景色なんだわ。——少将の来訪がちょっとでも途切れると、飽きられたのかと悲しい。さらに、四、五日も途絶えると、もう来訪がないかと心が乱れる。

(『集成』・頭注)

ただでも枯れ野の秋に、あの人の心に飽きの兆し。ますます足の遠のく様子が悲しいこと。(『新大系』・脚注)

すなわち、『全集』以降の相対的に新しい注釈書は、問題の「に」を添加の意を表す接続助詞と解していることが知られ、その方向での解釈が今日主流となってきたということだ。が、これはいかにも苦しい。

なぜならば、この一首の構造は、「〜ガ〜ノハ〜ダッタノダナア」の形式を踏む左の歌々、

たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心をつくるなりけり

(『古今集』恋一—四八〇・在原元方ノ『後撰集』恋二—一六八七・紀貫之)

篝火の影となる身のわびしきはながれて下に燃ゆる

なりけり

(『古今集』恋一—五三〇ノ『古今六帖』—一六三九・

紀貫之)

世の中に忍ぶる恋のわびしきは逢ひてのちの逢はぬなりけり

(『後撰集』恋一—五六四)

菊の花植えたる宿のあやしきは老いてふことをしらぬなりけり

(『貫之集』—一八三ノ『古今六帖』—二二九五)

年深く老いぬる人のかなしきは咲ける花さへ暗きなりけり

(『千里集』—一二)

山隠れ消えせぬ雪のかなしきは君まつ葉にかかるとまったく同じく、

(『兼盛集』—一〇)

人心あきのしるしのかなしきはかれゆくほどのけしき

なりけり

であるとしが考えられないからである。つまり、第三句「かなしき」の本文にしたがって当該歌を解釈するのは妥当でない、というよりも、そもそも不可能なのであって、問題の「に」は、「者」「爾」の誤写によって生じた転訛本文とみて、ただちに「は」に戻してやらねばならない、ということ

なのだ。

ちなみに、『全釈』は

「悲しきに」はあるいは「悲しきは」の誤りであろうか。

刈谷二冊本のみは「悲しきは」であるが意改の懼れがあるので、にわかには従えない。ただし意が通じかねるので、一応「悲しきは」に改めて解いておく。(注)

と述べ、疑問本文は「に」のまま、

秋が来た——男の心に飽きが来た——しるしが悲しいのは、草木が枯れてゆく——男の心が離れて行く——あいだの景色——男の態度であつたよ。

と「訳」していたし、『対照』も、『第三句は「かなしきは」とありたいところ。その意に解した』（脚注）と断つて、一首を、

秋の枯れゆく景色が悲しいように、男心に飽きたぎざしが見えて悲しいのは、あの人から離れて行くこの頃のそぶりであつたのだ

と「現代語訳」していた。返す返すも惜しまれるのは、そうした正しい判断が底本文の改訂にまで及ばなかったことだといえよう。

また、『評釈』、『新註』、『全書』、上田『新釈』、佐伯・藤森『新釈』、『全註解』は、本文を「かなしきは」としたうえ

で、それぞれ歌の解釈を試みている。根拠を明示するものは皆無だが、これは先に示した一部伝本文による校訂作業の産物であつて、私が主張する推測批判に基づく復原とは、根本的に方法を異にする。おそらく、これらの注釈書も、当該箇所を「かなしきは」とする伝本が現存していなければ、意改に踏み切ることはなかつたであろう。要は、「に」に対する異文「は」があろうがなかるうが、理屈からして、「人心」歌の第三句は「かなしきは」でなければならぬということなのである。

『思はぬ方にとまりする少将』の本文再建（および正しい解釈）については、拙稿『思はぬ方にとまりする少将』とどこどころ（『語文研究』、平五・六）においてほぼ論じていた。やや冗長になつたが、本節はその補遺ということになる。

三 一といれつに・せめてはならぬのゝ破れ襖

最後に、『よしなしごと』の次の箇所から二点。

まづいるべきものどもよな。雲の上に響き昇らむ料に、
天の羽衣 一いといれつに侍る、求めてたまへ。それなら
では、ただの袷、衾、
せめてはならぬのゝ破れ襖に

ても。

(五一頁八行〜五二頁五行)

「師にしける僧」が「女」に宛てた戯れ文の、物乞い部分の冒頭である。まずは傍線部だが、従来の諸説を主要な発言とあわせて整理分類してみると、左のとおりになる。

A「二つ、いと料に」説(『校註』／『評釈』／『新註』／『新講』／上田『新釈』／佐伯・藤森『新釈』／『全釈』／『注釈的研究』／『対照』／『全訳注』)

「料」は底本「れう」にあてたのである。大変必要な品でございます。ただし「いと」のかがりがやや不確かである。刈谷両本「えう」、続群書本は「よつ」。

「よつ」(用)の本文をとる説もある。(『全釈』・注) B「二つら、用に」説(『全註解』)

諸本は「……いとれう(料)……」とある。「二つら」が連続して記されて「二つら いと」となったのであると思う。故に今改め正した。後にも「長筵一つら」と見えて居る。(『全註解』・考異)

C「二つ糸、綾に」説(『全集』／『集成』／『完訳』)

「二つ糸、綾に侍る」と解した。「羽衣」の説明句。実在しない一つ糸の綾織りというおもしろさ。「天人ノ衣八経無シ」(西陽雑俎)などをふまえる。

(『全集』・頭注)

右三説のうち、B・Cの両説は、「一」を「天の羽衣」の

数量を表す「二つ」と素直に読まない点で失格。通説となっているAは、「いと料に」が意味不明となる点で同じく不合格と判定してよい。この文脈に期待されるのは、「天の羽衣」が「めつたにない」衣裳であるとの意であろうから、ここで新たに提案したいのは、「れう」の「れ」は「け」の誤り——誤写過程としては、「介」「礼」または「遣」「連」が想定可能——であって、問題の本文は元来、

天の羽衣一つ。いと希有に侍る

だったのではないかというアイデアである。「れう(料)」ならぬ「けう(希有)」は、漢訳仏典にしばしば見える仏教用語でもあるために僧侶の語彙としてまことにふさわしく、当該文脈での使用も、

(道真力)物を繰り出すやうに言ひ続けるほどぞ、まことに希有なるや。

(『大鏡』第二・左大臣時平／新潮日本古典集成・六八頁)

この入道殿下の御一つ門よりこそ、太皇太后宮・皇太后宮・中宮三所出でおはしましたれば、まことに希有希有の御幸ひなり。

(同第五・太政大臣道長／同・二五一頁)

君、何ナル功德ノ有ルゾ。忽三三十年ノ命ヲ延タリ。此レ、甚タ希有也。

(『今昔物語集』 卷第六―四十七ノ新日本古典文学大系 二・八九頁)

等々の用例から推して十分に考え得るのではなからうか。ついで、傍線部に移ろう。前項と同様の方法でこれまでの諸説を類別し一覽にしてみると、

A「せめてはならば、布の破れ襖」説(『新講』ノ『大系』) せめてこれだけとはいう所ならばの意か。

(『大系』・頭注)
B「せめてならば、布の破れ襖」説(『全釈』ノ『注釈的研究』ノ『対照』ノ『全訳注』)

底本・大系底本「せめてはならば」とあるが、「は」は神宮本・天和本等にないから、しばらく衍字とみておく。ただし「は」があっても解けないことはない。せめては、「^せめて」の義で、ぎりぎりどんつまって。「せめてならば」は稀有な言い方のよつであるが、ぎりぎりどんつまりのところというならの意とみておきたい。所氏は「せめて、成らば」とみて、「せめて、出来るなら」の意にとれまいかといっておられる。なお「せめてなくは」(底本の「ら」「も」「く」に字形が

近い。三手文庫本など「なくは」とある由)の本文をとって「どつしてもないなら」の意とする説もある。

(『全釈』・注)

C「せめてなくは」(「ば」、布の破れ襖)説(『評釈』ノ『新註』ノ『全書』ノ上田「新釈」ノ佐伯・藤森「新釈」) せめて、なくは、布の破れ襖」説(『全註解』)

無理しても求めて欲しい。万が一なければ、「せめて」は、どつしても、どつしてもこうしても、何としても求めて欲しいと言つのである。「せめて」は「破襖にても」の下に略された「求め給へ」にかかる。後にも「せめては只、足鍋」などがある。

(『全註解』・語釈語法)

D「せめてはならばぬ野の破れ襖」説(『全集』ノ『集成』ノ『完訳』ノ『新大系』)

通説「せめてならば布の破れ襖」の本文により、また「せめてなくは」の誤りとする。今「襖、狩襖也」といふ「狩襖」を「野の襖」といったとみた。袷の一種で旅にも用いる。(『全集』・頭注)
破れ狩衣(狩襖)。武官の朝服である位襖と區別して、野外の狩獵に着用し、公家の略服となった狩襖を、「野の」とし、僧侶だから「馴らはぬ」といった。

となる。「せめては」の「は」は、高松宮家蔵本や広島大学蔵本等いわゆる善本にはあり、「ならば」を「なくは」とする伝本は、『校本』を信頼するかぎり、静嘉堂文庫蔵日尾荆山旧蔵本のみである(四五頁)。

さて、既存の四説についていうなら、A・Bは、「せめて(は)ならば」という語法の不自然さにおいてとつていしたがつこののできない説であり、D説も、「野の破れ襖」なる名称の奇妙さにおいて採れないのは明らかだ。強いて選択するならば、消去法が残ったくないし、説といつことになるが、それもいかがが。「ならば」を「なくは」に改める手はたしかにあると思うけれども、その場合、上に「せめて」がくるのははなはだ疑問であるし、後文に「またきなくは、破れ筵にても貸させ給へ」(五四頁七〜八行)、「これらなくは、網代屏風の破れたるにも貸し給へ」(五五頁四〜六行)、「それなくは、欠け罎にまれ貸し給へ」(同頁八行)などである書きぶりとくらべても違和感を禁じ得ない。

そこで、一案として、「ならばぬ」の「ぬ」の字の下にもとは踊り字「ゝ」があつたのではないか、という仮説を当座提起しておきたい。「ゝ」が連綿の加減によって失われることはたやすく想定され、もしそうだとするなら、傍線部本

文は、「せめてはならばぬゝのゝ破れ襖」、すなわち、

せめては、慣らばぬ布の破襖にてもと読めることになる。

今日は皆狩装束にて、烏帽子姿ども、慣らばぬ御心地にをかしく御覽す。

〔栄花物語〕 卷三十七ノ日本古典文学大系・四九八頁
閑の清水に宿るわが面影は、出で立つ足元よりうち始め、慣らばぬ旅の装ひいとあはれにて

〔とはずがたり〕 卷四ノ新日本古典文学大系・一六九頁

などの例を参考にすれば、「慣らばぬ」を「着慣れない」の意に解くことは許されるかと思つた。

『よしなしこと』は難敵だ。本節で提示した二案もいまだ試案といつにとどまる。この作品本文の全面的な検討については、他日を期したい。

注

注1

『堤中納言物語』の本文は、高松宮家蔵本(池田利夫解題、復刻日本古典文学館)、宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本(池田利夫解題、笠間書院)、広島大学蔵浅野家旧蔵本(塚原鉄雄解説、武蔵野書院)、穂久邇文庫蔵久邇宮旧蔵本(久曾神昇解題、汲古書院)、吉田幸一氏蔵平瀬家旧蔵本(吉田幸一解題、古典文庫)、

桃園文庫蔵島原本（寺本直彦解題、東海大学出版会）、桃園文庫蔵神原本（同上）、三手文庫蔵今井似閑自筆本（塚原鉄雄・神尾暢子校注、新典社）の八本を参照し、適当と思われるかたちで引用した。なお、頁・行数の表示については、とりあえず最後にあげた新典社本ものを掲げたが、特別な意味はない。

今回参照あるいは引用した『堤中納言物語』の注釈書その他と稿中における略称は以下のとおり。久松潜一『校註堤中納言物語』（明治書院、昭三）『校註、清水泰』増訂堤中納言物語評釈（立命館出版部、昭九）『評釈、佐伯梅友』新註国文学叢書・堤中納言物語（講談社、昭二四）『新註、松村誠一』日本古典全書・堤中納言物語（朝日新聞社、昭二六）『全書、吉澤義則監修』堤中納言物語新講（藤谷崇文館、昭二七）『新講、上田年夫』堤中納言物語新釈（白楊社、昭一九）上田『新釈、佐伯梅友・藤森朋夫』堤中納言物語新釈（明治書院、昭三二）佐伯・藤森『新釈、寺本直彦』日本古典文学大系・堤中納言物語（岩波書店、昭三二）大系、山岸徳平『堤中納言物語全註解』（有精堂、昭三七）『全註解、松尾聰』堤中納言物語全釈（笠間書院、昭四六）『全釈、稲賀敬一』日本古典文学全集・堤中納言物語（小学館、昭四七）『全集、土岐武治』堤中納言物語の注釈的研究（風間書房、昭五一）『注釈的研究、池田利夫』旺文社文庫・現代語訳対照堤中納言物語（旺文社、昭五四）『対照、三角洋一』講談社学術文庫・堤中納言物語全訳注（講談社、昭五六）『全訳注、塚原鉄雄』新潮日本古典集成・堤中納言物語（新潮社、昭五八）『集成、稲賀敬一』完訳日本の古典・堤中納言物語（小学館、昭六一）

『完訳』、大槻脩『新日本古典文学大系・堤中納言物語』（岩波書店、平四）『新大系』、土岐武治『堤中納言物語・校本及び総索引』（風間書房、昭四五）『校本』。

（こと） やすみ・北海道大学大学院教授